

C 部会のまとめ

協議主題 3	小学校教育との接続に向けた教育課程や指導方法の工夫について
--------	-------------------------------

1. はじめに

幼稚園教育において育まれた資質・能力を踏まえ、小学校教育が円滑に行われるよう、小学校の教師との意見交換や合同の研究の機会などを設け、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を共有するなど連携を図り、幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続を図るよう努めるものとするところがあるが、連携と接続の違いを踏まえつつ、幼稚園教育要領でもとめられている接続を図るためには、今後、どのような工夫が必要になってくるのか協議を行った。

2. 実践事例の概要

事例 1

- ① 「サマーキャンプ」を通して自立や友だちとの親しみ・チャレンジの心を養うことをねらいとし、生きる力を身につけていく事例。
- ② 「朝の会・帰りの会」にて振り返り時間を取り入れ、自分の意見を持つ・伝える・表現することを経験し、自己を発揮することを身につける事例。

事例 2

- ① 遊具遊びや運動遊びを保育の中に取り入れ、体幹を鍛え、姿勢・集中力・筆圧などの改善につながった事例。
- ② 夕涼み会の準備を通して、協調性・思考力の芽生えなどを促した事例。

事例 3

仲間意識の向上から自発的な問題解決意識の高まりまでの取り組み

- ① 室内遊び・集団遊び・戸外遊びの中での話し合いを大切にしたい事例。
- ② サツマイモ掘りで五感を使わせて、自立・協調性・表現などを高めた事例。

事例 4

- ① 給食配膳を通して責任感が身につく、時間にも少しずつ意識を持ち、自分でできるという自信をつけていく事例。
- ② 日常保育の中で子どもたちが抱いた疑問点・興味から、自ら調べる習慣を身につけていく過程の事例。

3. 協議のまとめ

小学校との接続において、「1校」への進学か、「10校以上」への進学かによって大きく課題が違う。小学校教師との意見交換や保育参観などを通しての連携が10校以上の進学では難しい現状があることがわかった。小学校教育との接続において保育を通して何をすべきか考え「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりに幼稚園と小学校の教師が共に幼児の成長を共有することを通して、発達を長期的な視点で理解することが大切であると実感した。

幼児教育が小学校教育の基礎となるので、日常の保育の中で、子ども一人一人の好奇心や探求心を促すことができる保育内容を考え、問題を見出したり、解決したりする力を育てること、

豊かな感性を発揮できる機会を提供し伸ばしていくことが大切である。私たち保育者は、今、向き合っている子どもの10年～15年後の社会や子どもたちの姿を想像しながら、子ども一人一人の成長に目を向け、「今」のこの保育を展開していく必要がある。

4. 指導・助言

幼稚園や保育所等での教育と小学校での教育に関する「接続」と「連携」について協議を進めた。その過程で感じた、関係者が再認識すべき事項をまとめる。

(1) お互いに使用する語句の共通理解について

職場の内外で話し合いが行われる。その際、「何かかみ合わない」と感じることもある。原因の一つに語句に関する各自の意味理解の食い違いがある。それを解消するために、例えば、『幼稚園教育要領』などの公文書や辞書で確かめることが、迂遠に見えて実は近道と思う。

(2) 「接続」について

人（ヒト）の発達とは「ゆりかごから墓場まで」との前提に立てば、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」という発想は短期的すぎる視点である。様々な発達課題が生涯、次から次へと人（ヒト）に訪れる。つまり、今、ここの保育が、その子どもの児童期を超えて、青年期や成人期にどう関与するのか、という長期的な視点が教師には求められる。

(3) 「連携」について

高松鶴吉（1990）が著書『療育とは何か』（ぶどう社）で「知的障害児教育の父」とされる糸賀一雄の指摘を回想している。

「良きチームワークをつくる心掛けはいかに」と先生に問うたことがある。師は答えて「これに三つの心掛けあり、すなわち己の専門性を高めること、他の専門性を尊重すること、さらには業績を己ひとりのものとせず常に我々全体の業績とすること、これなり」と仰せられた。(p. 61)

この指摘を問いに変換する。

幼稚園等の先生方は自身の本務本業を即、平易に説明できるか。小学校教育を心底リスペクトしているか。自己防衛的な振る舞いなどをせず、子どもの幸せを支える幼稚園等という社会装置を日々手入れしているか。さて、いかがか。